

顕現後第4主日 マルコ1章21―28節

〔新共同訳〕

21 一行はカファルナウムに着いた。イエスは、安息日に会堂に入って教え始められた。22 人々はその教えに非常に驚いた。法律学者のようではなく、権威ある者としてお教えになったからである。

23 そのとき、この会堂に汚れた霊に取りつかれた男がいて叫んだ。24 「ナザレのイエス、かまわなくてくれ。我々を滅ぼしに来たのか。正体は分かっている。神の聖者だ。」25 イエスが、「黙れ。この人から出て行け」とお叱りになると、26 汚れた霊はその人にけいれんを起こさせ、大声をあげて出て行った。

27 人々は皆驚いて、論じ合った。「これはいったいどういうことなのだ。権威ある新しい教えだ。この人が汚れた霊に命じると、その言うことを聴く。」

28 イエスの評判は、たちまちガリラヤ地方の隅々にまで広まった。

①マルコ福音書1章の文脈

①a マルコ1章1―15節は福音書全体の序とされている。天上で神がイエスに「あなたより先に使者を遣わし、あなたの道を準備させよう」と述べていたように、荒野野に洗礼者ヨハネが現れ、救いが成就する終わりの日に先立つ預言者として、悔い改めの洗礼を宣べ伝え、「私より優れた方が、後から来られる」と宣言していた。イエスがナザレから来て、彼から洗礼を受けると、霊が鳩のように下り、天から声が聞こえた。それから、荒野野で四十日間、サタンから誘惑を受けたが、天使が彼に仕えていた。洗礼者ヨハネが逮捕されると、イエスはガリラヤへ行き、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と言われた。

①b 16―20節は「四人の漁師を弟子にする」物語である。ガリラヤ湖畔をカファルナウムに向かうイエスは、二組の兄弟が仕事をしているのを見て、声を掛けると、彼らは網や家族や舟を手放して、イエスに従った。

①c 1章21―28節は「カファルナウムの一日」と呼ばれる一日の最初の出来事である。この出来事の後、29―31節では個人の「家」で、病に苦しむペトロの姑から熱を退散させ、32―34節では公の場につながる「戸口」で、さまざまな病を癒し、悪霊を追い出している。イエスは宗教生活の場からも個人生活の場からも公の生活の場からも、人を苦しめる力を追い払っている。この一日はイエスが生涯にわたって果たす役割を凝縮した一日である。

②権威を持つ者のように(21―22節)

イエスがカファルナウムに入り、会堂に入って、教えると、人々はその「教え」に「驚いた」。法律学者のようではなく、「権威」を持つ者のように教えていたからである。

㉞そして すぐに 安息日に 会堂の中に入って、彼は教えた
21節にはイエスが会堂の中に「入って」教えたとある。これに対応して、28節にはイエスの評判がガリラヤ地方のいたるところに「出た(広まった)」と述べられている。

21 そして 彼らは入る カファルナウムの中に。

そして すぐに 安息日に 会堂の中に入って、 彼は教えた。

28 そして 出た 彼の評判が すぐに ガリラヤの周辺全体くまなく。

イエスが中に入って教えると、その評判が外に出て行くと述べたのは、イエスの「教え」の力強い働き(権威)を強調するためである。

㉟イエスは会堂で何を教えたのか

マルコはイエスの教えの内容については何も書かない。だが、たとえば、4章1節での「教え」が11節で「神の国の秘密」と言い換えられているように、イエスの教えとは「神の支配(神の国)」についての教えである。イエスは福音を告げて「時は満ち、神の国は近づいた」(15)と述べていた。この「神の支配(神の国)」が、イエスを通して働いているから、四人の漁師はイエスに従い(16―20節)、汚れた霊が会堂から追放される。

㊱権威を持つ者のように そして 律法学者たちのようにでない

イエスの教えは神の支配についての教えであるから、そこには権威が備わっている。律法学者のようにではなく、「権威を持つ者のように」教えることができるのは、イエスが「神の支配」を運んでいるからである。

㊲汚れた霊を追い出す(23―26節)

会堂には汚れた霊のついた人がいた。この霊が「汚れた」とされるのは神に敵対する霊だからである。この男自身が汚れているのではなく、サタン(原意は「反対者・敵」)の支配に侵されていたのである。

汚れた霊は「我々を滅ぼしに来たのか」と叫ぶ。これは平叙文に訳すことも可能である。汚れた霊はイエスが誰であり、何を行うために来たかを知っている。そうであれば、平叙文とするのが良い。古代人は相手の正確な名前を口にすれば、それへの支配権を確保できると考えていた。そこで、汚れた霊はイエスに打ち勝つために、機先を制して、イエスの名を口にし、「神の聖者だ」と叫び、自分を守ろうとする。しかし、イエスは「黙れ、彼から出ろ」と命じる。すると、大声を上げて彼から出て行った。

㊳そして すぐに いた 彼らの会堂に 汚れた霊のついた人が

㊴マルコは既存の伝承を使って、彼の福音理解を福音書という形で述べている。23―27節も本来は独立した一つの奇跡物語であり、マルコ以前に出来上がっていた伝承だと言われる。

④その痕跡は23節の「すぐに」に見られる。この副詞は新約聖書には合計51回現れ、そのうち41回がマルコ福音書での用例である。マルコが好む言葉であり、しかも既存の伝承と伝承とをつなぎ合わせるための編集句に使われることが多い言葉である。

⑤「すぐに」は動作や変化を表す動詞と一緒に使われるのが普通だが、23節では状態を表す動詞「いる」と一緒に使われている。マルコはいささか不用意に「すぐに」を用いて、既存の伝承である23―27節と21―22節（マルコによる文章）とを結び合わせたと考えられる。

⑥27節は既存の伝承に含まれるが、「権威を持った新しい教え」はマルコの挿入であり、これによって21―22節との対応が意識されている。

⑥ 汚れた霊の追放

イエスの教えは神の支配についての教えであるが、それは単なる言葉で表現される教えではなく、出来事によって表される教えである。だから、23―26節には汚れた霊の追放が語られる。霊能者による悪霊追放は古代世界全体に見られる現象であり、それを伝える物語もヘレニズム世界に広く流布しているが、それらの物語には一定のパターンがある。それをあげると、次のようになる。

⑦ 神的霊能者に気づいた悪霊は、相手の名前を唱えることによって相手を支配し、自己を防御する。

⑧ 神的霊能者は悪霊に沈黙を命じる。

⑨ 悪霊が追放される。

⑩ 目撃者が驚きの声を上げる。

23―26節の奇跡物語もこのパターンに従っている。23―24節は⑦にあたり、25節が⑧に、26節が⑨に、そして27節が⑩にあたる。

⑪このようなパターンに従って物語られているということは、23―27節がマルコ以前にでき上がっていた伝承であるという推測をいっそう確かなものとするだろう。マルコはこの既存の伝承の前に、「イエスの権威ある教え」を述べる21―22節を置くことによって、イエスの行った奇跡の意味を新たに捉え直したのである。既存の伝承だけを読むなら、イエスはヘレニズム世界に広く見られた神的霊能者のひとりで終わるだろう。だが、マルコは21―22節を伝承の前に置き、伝承の一部であった27節に「権威を持った新しい教え」を挿入することによって、この奇跡を「神の支配」の到来を告げる出来事として正しく述べることでできたのである。マルコにとって、27節はもはや悪霊追放物語の一部ではなく、神の支配を目的にした者の驚きを表す節になっているので、27節は第二段落ではなく、第三段落に含まれる。

⑫23節の「すぐに」は動詞「いた」にかかる副詞であるが、「すぐにいた」では奇妙である。そこで、新共同訳のようにこの副詞を「その時」と訳すか、あるいは動詞「いた」の意味を「現れた」と解釈するか、そのどちらかとなる。後者であれば、汚れた霊に取りつかれた男は、イエスが会

堂に来たと知って「すぐに」現れたことになり、悪霊からの解放を願うこの人の切ない心が表されていると言えるだろう。

㉔ 「何が 私たちに そして あなたに」

24節「かまわないでくれ」の直訳は、「何が 私たちに そして あなたに」となる。ヘブライ語に由来する慣用句で、「私たちとあなたにどんな関係があるのか」の意味であり、次の三つの解釈が可能である。

㉔ 他人から（不当に）苦しめられている人が述べるなら、「私があなたに何をしたからといって、そうするのか」の意味。

エフタは、アンモンの王に使者を送って言わせた。「あなたはわたしと何のかかわりがあるか。わたしの国に戦いを仕掛けようと向かって来るのか。」（士一 12）

㉕ 自分の仕事ではないと思っていることを求められたときには、「それはあなたの仕事で、私は関与できない」の意味。

エリシャはイスラエルの王に言った。「わたしはあなたとどんなかかわりがあるのか。あなたの父の預言者たちや母の預言者たちのもとに行きなさい。」イスラエルの王は答えた。「いいえ、モアブの手に渡そうとしてこの三人の王を呼び集められたのは主だからです。」（王下三 13）

㉖ 当事者のどちらもが、自分の仕事ではないと思っていれば、「それは私たちが関わるべきことではない」の意味。

王は言った。「ツェルヤの息子たちよ、ほうっておいてくれ。主がダビデを呪えとお命じになったのであの男は呪っているのだから、『どうしてそんなことをするのか』と誰が言えよう。」（サム下一六 10）

ここでは、㉗ 「私があなたに何をしたからといって、そうするのか」の意味であり、相手を否定する抗議の叫びである。汚れた霊は、イエスの名前を唱えることによって、イエスを支配しようとするが、イエスの叱りつける言葉によって、人から追い出される。

㉗ 「黙れ、 そして 出る 彼から」

そして 彼を叱った イエスは 言って、

「黙れ、 そして 出る 彼から」。

そして 彼を引きつけさせて 汚れた霊は、

そして 声を出して 大きな声で、 彼は出た 彼から。

イエスが「黙れ、彼から出る」と命じると、汚れた霊はイエスの言葉の通りに「彼から出た」。イエスの言葉は出来事となって現れる力ある言葉である。神が「光あれ」と命じると、「光があった」と天地創造の物語は述べる。そこに示されている神の権威を、イエスは与えられている。

㊸ 叱る (エピテーマオー)

エピテーマオーは、ある行動を阻止したり、終わらせるために「叱る・戒める」を意味する。新約聖書では29回使われるが、2テモテ4章2節とユダ9節を除けば、すべて共観福音書での用例である。

㊹ イエスが主語になる用例が多い。

イエスが叱る相手は、受難予告を聞いてイエスの行動を押しとどめようとした。ペトロであり(マコ八33)、イエスを歓迎しないサマリア人に対して「天から火を降らせ、焼き滅ぼしましようか」と提案した弟子たちである(ルカ九55)。

㊺ 叱る相手が人間以外のこともある。

イエスは嵐や突風を静めるために「風・湖・波」を叱り(マコ四39、マタ八26、ルカ八24)、ペトロのしゅうとめをいやすために「熱」を叱り(ルカ四39)、汚れた霊に取りつかれた人をそこから解放するために「悪霊・汚れた霊」を叱っている(マコ九25、マタ一七18、ルカ九42)。

㊻ また、「戒める」の意味で使われることもある。

イエスは自分がメシアであり、神の子であることを言いふらさないようにと「戒める」。イエスにひれ伏し「あなたは神の子だ」と叫ぶ汚れた霊に、それを言いふらさないようにと「戒め」(マコ三12)、ペトロが弟子を代表してイエスはメシアだと告白したとき、それを誰にも話さないようにと「戒め」(マコ八30、ルカ九21)、イエスからいやしを受けた人々に、イエスのことを言いふらさないようにと「戒めている」(マタ一二16)。また、イエスは弟子たちを教え、もし兄弟が罪を犯したら、「戒めなさい」と諭している(ルカ一七3)。

㊼ イエス以外の人物が主語となることもある。

イエスはメシアだと告白したペトロは、イエスが受難を予告すると、イエスをわきに連れて行って「いさめる」(マコ八32)。また、弟子たちは、イエスのもとに子どもたちを連れて来た人々を「叱り」(マコ一〇13ほか)、群衆は、イエスに憐れみを求めて叫ぶ盲人を黙らせようとして「叱り」(マコ一〇48、マタ二〇31、ルカ一八39)、イエスと一緒に十字架につけられた犯罪人の一人は、イエスをののしるもう一人の犯罪人を「たしなめている」(ルカ二三40)。

㊽ 汚れた霊を叱る

㊿ マルコ1章25節では、イエスは汚れた霊を「叱って」追い出し、汚れた霊から人を解放している。その際、イエスは魔術的な手段を何も用いず、ただ叱るだけで、汚れた霊を追い出す。イエスは魔術的な霊能者なのではない。神の支配を運ぶ「神の聖者」である。イエスを通して、神は悪霊の支配に終止符を打とうとしている。

㊿ イエスの宣教は悪霊払いから始まる。しかも、悪霊払いは一度だけではなく、何度も繰り返されており(一34、三22、五8、七29、九25)、イエスに派遣される十二人にも悪霊を追い出す権能が与えられている(三15、六7)。悪霊払いが福音宣教から切り離せないのは、それが神の国の到来を告げる出来事だからである(ルカ一一20を参照)。

① 黙らせる（フィーモオー）

⑦ フィーモオーは、文字どおりには「餌が食べられないように動物の口を口輪で閉じる」の意味である。この文字どおりの意味での用例は一度だけであり、脱穀している牛に「口籠をはめてはならない」と使われている（1テモ5 18）。だが、これ以外の6回の用例はすべて「黙らせる・黙り込ませる」の意味である。

④ 共観福音書では5回使われる。マタイ福音書の「婚宴のたとえ」では、礼服を着ないで宴会に来た者が、王から礼服を着ていない理由を尋ねられとき、返答できずに「黙っている」（マタ 22 12）。また、イエスはサドカイ派の人々と復活についての論争したとき、彼らを圧倒して「黙り込ませる」（マタ 22 34）。

⑦ これら以外の三例ではいずれもエピテイーモオー（叱る）と一緒に使われている。

マルコ 1 章 25 節では、イエスが悪霊を「黙れ」と叱ると、悪霊は男から出て行く（ルカ 4 35 でも）。イエスが激しく吹く風を「黙れ、静まれ」と叱ると、風はやみ、すっかり凪になった（マコ 4 39）。「黙れ」と叱るイエスの言葉は、人が発する命令と違い、悪霊に打ち勝ち、風を従わせる権威がある。だから、イエスに出会った人々の驚きは、イエスが悪霊払いに成功したという事実そのものではなく、イエスの言葉に表された権威に向けられている（27 節）。

⑤ 「権威」という語は、人間がその地位や職務によって持つ「権能・権限」の意味でも使われるが、人を救うために神が発揮する権威をも表す。「黙れ」というイエスの叱責は、人を悪霊の支配から救い出す、権威ある言葉である。イエスはこうした権威を帯びる者として行動し、救いの時が到来したことを人々に告げ、「神の支配（＝神の国）」を運ぶ。四人の漁師がイエスに従ったのも、汚れた霊を追い出したのも、この支配の実現なのである。

④ 権威ある新しい教え（27―28 節）

② 23―26 節の悪霊追放の奇跡を、「権威ある教えに驚いた」と述べる 21―22 節と 27―28 節によって、囲い込んでいる。汚れた霊の追放はイエスの「権威ある教え」の例証である。イエスは汚れた霊を従わせることによって、彼の教えが「権威」をもった新しい「教え」であることを示す。

③ 人々はこの汚れた霊の追放という出来事に驚き、「権威ある新しい教え」だと語り合う。イエスの教えは救いの出来事による教えである。救いをもたらそうとする神の力のゆえに、イエスの教えは真の権威をもった、後にも先にもない新しい教えである。人々はそれに「驚き」、イエスの評判はガリラヤの周辺全体に行きわたった。

③ 権威（エクスーシア）をマルコは 10 回用いるが、13 章 34 節を除く 9 回は、イエスが行う悪霊追放や病者の癒しに示された「権威」を表している（三 15、一 28―33 など）。この語は新約聖書に特徴的な用例では、王の権力とか律法学者の学問的権威ではなく、福音をもたらすイエスの驚くべき業のうちに顕現する神の働きを指している。福音は律法学者の教えではなく、神の支配を現すイエスの教えによってもたらされた。

④ イエスの教えは神の支配そのものである。神に敵対する汚れた霊の支配から人を解放するのは、神の支配を現すためである。神との交わりを妨げられていた人は、イエスの力ある業によって神の前に立つことになる。イエスの教えは救いの出来事として見えるものとする。イエスの教えの「権威」は出来事に示された神の支配に基づいている。